SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ザ・ハーダー・ゼイ・フォール
報復の荒野

2021年／アメリカ映画
配給：Netflix／137分

2021（令和3）年10月30日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２１－１４１

監督・脚本・原案：ジェイムズ・サミュエル
出演：ジョナサン・メジャーズ／イドリス・エルバ／ザジー・ビーツ／ラキース・スタンフィールド／デルロイ・リンドー／レジーナ・キング

みどころ

西部劇には、ジョン・ウェイン主演の「正統派」以外にも、マカロニ・ウェスタンをはじめ、いろいろある。『デッド・ロック』（７０年）はニュー・ジャーマン・シネマによる異色の西部劇だったが、「MeToo」と「黒人差別反対運動」が盛り上がる昨今、本作は“オール黒人”による異色の西部劇だ。
タイトルだけでは何の映画かさっぱりわからないが、「報復の荒野」と聞けば、なるほど、なるほど。登場する黒人たちの名前と顔が容易に一致しないのが難点だが、黒人ガンマンの美学を含め、「黒人の、黒人による、黒人のための西部劇」をしっかり楽しみたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■このタイトルはナニ？今ドキ、なぜNetflixが西部劇を？■□■

本作のタイトルになっている「ザ・ハーダー・ゼイ・フォール」（The Harder They Fall）って、一体ナニ？「報復の荒野」という日本語のサブタイトルを読むことによって、やっと「これは西部劇！」だとわかるが、“Netflix”が配給する本作は、一部劇場でのみ公開される映画だ。黒人のラッパーがプロデューサーを務めた本作は、監督もキャストも黒人ばかり。そのため、私は誰の名前も知らないが、“新感覚の西部劇”と聞けば、こりゃ必見！

冒頭、幸せに暮らしている牧師の家に暴漢が押し入り、無残かつ非情に両親が殺されてしまったが、残った一人息子は？このシークエンスは、どんな物語の伏線に？

■□■本作は、黒人の、黒人による、黒人のための西部劇！■□■

そんな冒頭を見ただけで、本作が「報復の荒野」というサブタイトルにピッタリの映画だということがわかる。しかし、なんせ顔を知らない黒人俳優ばかりだから、続く本格的ストーリーの主人公は一体誰？ひょっとして、この幼い子供の成長した姿がそれ？鑑賞後に資料を調べると、ズバリその通りだった。この、「自分の縄張りを荒らされた者には情け

容赦なく頭を打ちぬく荒くれ者」の男が、本作の主人公ナット・ラブ（ジョナサン・メジャース）だ。

他方、アメリカの荒野を駆け抜ける列車を、ならず者集団が襲撃する風景は西部劇によく出てくるが、本作でもそんなストーリーをしっかり楽しむことができる。そこには複雑なカラクリが含まれているようだが、要するに、脱走（釈放？）した“悪党中の悪党”ルーファス・バック（イドリス・エルバ）を彼の仲間たちが救出するストーリーだ。何でも説明調の近時の邦画なら、くどいほどその状況が説明されるが、本作ではそれが全くない。そのため、全体のストーリー展開は読みにくいが、きっとこの男・ルーファスこそ、ナットの父親と母親を殺した「あの、にっくき男！」なるほど、なるほど・・・。

本作がすごいのは、主人公のナットもナットの父親と母親を殺した憎き男ルーファスも黒人であること。主人公の男性が黒人なら、その横に従う女性も黒人？そんな推察もピッタリ。まさに本作は、黒人の、黒人による、黒人のための西部劇なのだ。ちなみに、クエンティン・タランティーノ監督が「映画史上最大の問題作」と絶賛したリチャード・フライシャー監督の『マンディンゴ』（７５年）（『シネマ４９』１３３頁）は、黒人処女の扱いから、黒人女の妊娠、妻妾同衾、等々、奴隷制度の恥部が満載だったから、本作はそれとは大違い！両者を対比して観れば、きっと面白いはずだ。

■□■時代背景は？舞台は？黒人だけの入植地ってホント？■□■

本作の時代背景はいつ？それは明示されないが、西部開拓史の時代であることは明らかだ。だって、ルーファスもナットも「黒人だけの町（入植地）」を持ち、その町を支配しているのだから。ハリウッド発の西部劇は大きく言えば、そのほとんどが西部開拓史の時代のもの。そして、当初はジョン・ウェイン主演の「騎兵隊もの」が主流だったが、その後どんどんバラエティ豊かになってきた。近時の『ゴールデン・リバー』（１８年）（『シネマ４５』１１２頁）や『荒野の誓い』（１７年）（『シネマ４５』１２０頁）はその代表ともいえる異色の西部劇だった。西部開拓史の時代の西部劇は、騎兵隊とインディアンとの「ドンパチもの」ばかりではない。『ゴールデン・リバー』では、１８４８年1月に起きたゴールドラッシュが一躍サンフランシスコを大都会に変身させていくストーリーと、それに伴って生まれる白人同士の欲を絡めた人間模様が面白く描かれていた。また、『荒野の誓い』では、ラストに向けて「俺の土地にインディアンを埋めるな！」「俺の土地から出ていけ！」という紛争が激しさを増していく中、１８９２年当時のアメリカ大陸における「土地は誰のもの？」という大テーマが突きつけられていた。

他方、１９６０年代のアメリカでは黒人差別に反対する「公民権運動」が盛り上がったが、それから５０年後の今は、「MeToo 運動」と、それに呼応した「黒人差別反対運動」が盛り上がっている。１９６０年代には、『荒野の用心棒』をはじめとするマカロニ・ウェスタンの登場に私たちは驚かされたが、西部開拓史の時代に本作のような「黒人だけの町」や「黒人のガンマン」、そして「黒人だけの無法者集団」が本当に存在していたの？

■□■この“対立構造”は、ウエスト・サイド物語と同じ？■□■

近々、新バージョンの『ウエスト・サイド物語』が公開されるが、１９６１年の『ウエスト・サイド物語』はジェット団とシャーク団の対決の中で描かれる、ロミオとジュリエットのような男女の純愛が美しく切ないドラマを生み出していた。それと同じように（?）本作でも、ナットとルーファスをそれぞれのリーダーとする無法者集団の対決が基本ストーリーだ。しかし、ジョン・ウェインの本格的かつ正統派西部劇はもちろん、マカロニ・ウェスタンとも全く異なる感覚の西部劇になっているから、それに注目！

また、『ウエスト・サイド物語』でも、ジェット団とシャーク団双方のバックにはそれぞれ女たちがいたが、本作でもナットとルーファスのバックには全くタイプの違う二人の女性がいる。そして、彼女たちは「MeToo の時代」らしく、主役に負けず劣らずの活躍をするので、それにも注目。

■□■ガンマンの美学は？最後の大激突は？■□■

本作にはパンフレットがないし、資料もほとんどない。「あらすじ」としては「自分の両親を殺した男が刑務所から釈放されることを知った無法者ナット・ラブは、男に復讐するために、かつてのギャング団を再結成する。」と書かれているだけだ。しかし、顔も名前もわかりにくい本作のストーリーを一生懸命見ていると、ストーリー展開はそれなりに見えてくる。そこで目に付くのは、登場人物たちのカッコづけ（?）があまりに強いことだ。

西部劇では“早撃ち”が何よりの自慢。そして、それが自分の命を守る最大の価値だが、所詮銃の勝負だから、後ろから撃たれれば即アウトだ。正統派西部劇における“正義の味方”のガンマンなら、早撃ちの美学にこだわりを持つのは当然だが、ナットやルーファスのような黒人の無法者集団にガンマンの美学はあるの？そこらがよくわからないのが本作の難点だ。ナットとルーファスの間で“ジリジリしたストーリー展開”がずっと続いていくが、さて、最後の大激突は？

『ウエスト・サイド物語』では、ジェット団とシャーク団の激突を避けるべくトニーが奮闘した。しかし、本作にはトニーのような人物はいないから、ナットとルーファスの激突は不可避。したがって、ストーリー的にはその最後の激突を如何に面白いクライマックスの見せ場にするかが脚本の“キモ”だが、娯楽映画たる本作におけるその激突に注目！「地の利」を含めて、誰がどう見ても圧倒的にルーファスの方が有利と思われるが、さて激突の勝者は如何に？その結末はもちろんだが、全体として「黒人の、黒人による、黒人のための西部劇」たる本作の面白さと問題提起は、あなた自身の目でしっかりと。

２０２１（令和3）年１１月４日記